※クリックすると記事のページを開きます。

（１）学校制度 2

（２）学年暦 3

（３）教育概要と特色 3

① 就学前教育 4

② 義務教育 4

・初等教育（小学校） 5

・前期中等教育（中学校） 7

③義務教育以降 7

・後期中等教育（高校等） 7

・高等教育（大学等） 7

・ノンフォーマル教育 9

参考文献； 9

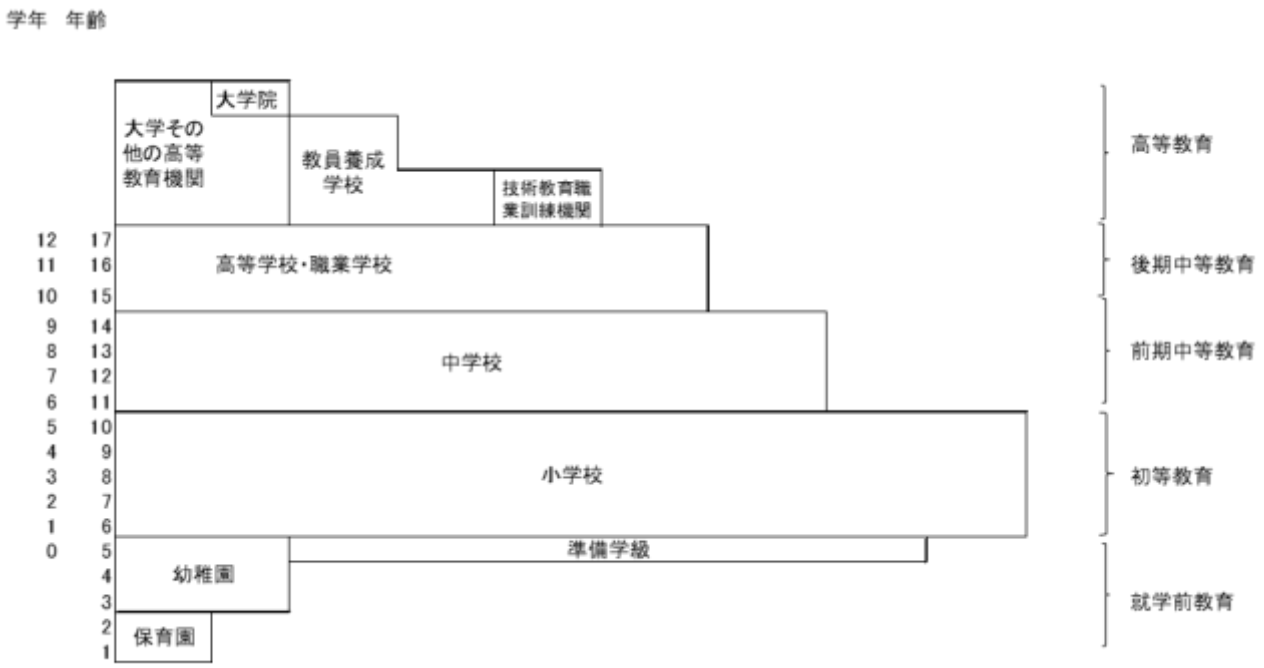
ラオスの教育制度

東京外国語大学ラオス地域研究　編

（１）学校制度

義務教育期間は、初等教育、及び前期中等教育期間の 9 年間（6～14 歳）です。大学の 4 年間を入れると、教育制度は 5･4･3･4 制で、 初等教育（1～5 年次生） 前期中等教育（6～9 年次生） 後期中等教育または職業学校（10～12 年次生） 高等教育（学習内容によって年数が異なる）となっています。

これを表に示すと下記のようになります。



津曲真樹「ラオス教育セクター概説」（2012.p17）をもとに一部編集

このほか、Non Formal Education(学校教育外教育)として、学校教育を受けられなかった人や、各種技術・専門知識を得たい人が年齢に関係なく入学できる学習の場もあります。

（２）学年暦

学年暦は原則として 9 月 1 日から次の年の 6 月 1 日までです。2 学期制で、1 学期は 9 月 1 日～1 月 31 日、2 学期は 2 月 1 日～5 月下旬から 6 月初旬です。（学校によって異なります。）

（３）教育概要と特色

国民の 7 割近くが仏教徒であるラオスでは、お寺が教育の場でもあります。現在でも男の子は成人前に出家をする習慣があり、この間、お寺で学ぶことになります。また、貧困家庭の子弟は教育を受けるため、寺に住み込むということもあります。しかし現在一般的には、義務教育である初等教育（小学校）に、概ね 6 歳で入学します。前期中等教育（中学校）、後期中等教育（高校等）への入学率は、地方では未だ低い水準にありますが、首都であるビエンチャン都をはじめとする都市部では、教育熱が高まっており、中学校、高校への進学率も高く、更に高等教育（大学等）へ進む者も多くなっています。 近年、こうした首都と地方との教育格差の拡大が目立って来たことも特徴の一つです。

ラオスにおける教育の問題として、先ず、政府の教育予算が極めて少ないという点が挙げられます。このため、教科書の不足、適切な校舎の不足、教員の能力不足、不適切な教員配置、遠隔地の学校における教育の質の低さ、教育行政能力の不足等の状況が生じています。また、初等教育においては、貧困、通学困難、保護者の学校教育に対する意識の低さに加え、少数民族の児童はラオス語を生活言語としないため、授業を受けるのが困難等の理由により、入学後に退学する児童が多いことも問題となっています。

進級のためには必要な出席日数が定められており、また小テストが実施され、成績が評価されます。制服はどこの公立校でも普及していて、男子は白いシャツに黒のズボン、女子は白いシャツに黒または紺色のシン（ラオス風巻きスカート）を着用します。ラオス国立大学の学生も制服を着ています。一方、地方によっ

ては経済上等の理由から、私服で登校している子もいます。基本的に昼食時は帰宅し家で食べ再び午後から登校しますが、小学校においては、近年給食を導入するところも出てきました。また遠隔地の場合は弁当や近隣の店で食べることもあります。

① 就学前教育

義務ではありませんが、小学校入学を前に、3 歳から 5 歳児を対象に幼稚園、保育園において有料で就学前教育を行っているところがあります。内容は、日常生活・道徳・音楽・舞踏・体育・文字・数字などで、給食のあるところもあります。幼稚園・保育園に入園しなかった子どもを対象とした、準備学級（予備クラス）があるところもあります。

② 義務教育

その年の 12 月 31 日までに満 6 歳になる者は、その年の 9 月 1 日に小学校の第 1 学年に入学することになっています。2015 年に改訂された教育法によると、中学校までが義務教育であり、公立校における義務教育は無償であるとされていますが、授業料は無料でも、施設修繕費などを負担する場合があります。また、以前は小学校の 5 年間のみが義務教育であったので、第 9 学年までが義務教育となったことがまだ国民には浸透していないようです。特に地方では農繁期には学校を休ませる、進学をさせないなどということも多々あります。一方、ビエンチャン都では、より教育の充実した私立学校への進学を希望する者が増えています。小学校の卒業試験に合格すれば中学校に進学でき、また、中学校の卒業試験（県単位の卒業認定試験）に合格すれば高校に進学できます。2016 年より、日本（算数）とオーストラリ

ア（他教科）の支援によりカリキュラムと教科書の改訂が行われています。土曜日・日曜日、祝日は休校です。

日本と違うところ

・年齢にかかわりなく入学できる。

・成績不良者には、留年・落第・補習がある。

・成績優秀者は飛び級・優秀クラスへの編入も可

・毎月各科目の定期試験で各科とも 7 点以上取った子には　プレゼント（文具等）がある

・国定教科書は 1 種類のみ

・授業は主に理論中心で、実験・実習は少ない

・評価は成績のほか制服、爪の長さ、髪などの身だしなみをチェックされる。優秀な生徒にはリボンが与えられる。

・親がバイクで送ったり、友達同士でバイクに乗って通学する子が多い。（右はバイクで通う学生）

・初等教育（小学校）

就学年齢は 6 歳～10 歳で、学年は第 1 学年～第 5 学年までの 5 年制です。授業はラオス語で行われ、教科はラオス語、算数、私たちの身の回り、芸術、体育、音楽、工芸などです。第 3 学年から英語も取り入れられています。朝 8 時から夕方 4 時半ごろまでで、1 授業 45 分、1 日 5 コマ～7 コマあり 1 年間 33 週間です。1 クラスおおむね 40 人～60 人程度です。近年、純就学率（年令に関わらず就学する子どもの人数）／（公式の就学年令に相当する子どもの人数）は 98.8％まで上昇しましたが、第 1 学年の退学率は 8.5％、留年率は 13.5%と依然高いです。遠隔地を中心に公立学校の教室のうち 27.8%が複式学級であり、授業の質の改善が求められています。（数値は 2015 年度）

ビエンチャン都の小学校の掃除風景

サイニャブリ県ナムカン村の小学校の授業風景

・前期中等教育（中学校）

就学年齢は 11 歳～14 歳で、学年は中等第 1 学年～第 4 学年の 4 年制です。純就学率は 82.2%（2015 年度）であり、近年、初等教育の拡大と共に飛躍的に増えています。入学試験があり、成績でクラス分けをされます。中学校の授業科目はラオス語、数学、社会（歴史・地理・公民）、自然科学（生物・物理・化学）、外国語、技術、音楽、美術、体育などです。

③義務教育以降

・後期中等教育（高校等）

就学年齢は 15 歳～17 歳で、中等第 5 学年～第 7 学年（1 年生～3 年生）の 3 年間です。純就学率は、高校で 47.8％（2015 年度）です。単位制のため、単位の取得状況によって早く進級、または卒業できます。大学への進学に当たっては、高校の卒業試験（全国単位の卒業認定試験）に合格した後、大学の入学試験（7 月）に合格する必要があります。また成績優秀者には、推薦入学制度があり、各県に割り当てられた推薦枠もあります。高校の授業科目は、ラオス語、数学、社会（歴史・地理・公民）、自然科学（生物・物理・化学）、外国語（英語かフランス語）、技術、体育です。日本の高等専門学校にあたる学校の場合、成績優秀者は大学への編入が可能です。

・高等教育（大学等）

大学は教養課程及び専門課程を含めて通常計 4 年間ですが、医学部（現在ビエンチャン都に 1 つ）は 7 年制です。（技術学校は 1 年～3 年、教員養成学校は小学教員養成の場合は 2 年もしくは 4 年、中学教員養成は 4 年です。）国立大学はラオス国立大学（ビエンチャン都）、スパーヌウォン大学（ルアンパバーン県）、サワンナケート大学（サワンナケート県）、チャムパーサック大学（チャムパーサック

県）の 4 つです。大学院はラオス国立大学とスパーヌウォン大学にありますが、一部の学部のみです。

大学の 2 年時には 1～2 週間の軍事訓練、3 年時には研修、インターンが必須となっています。卒業式は　8 月末か 9 月上旬に行われ、花の冠とぬいぐるみで祝います。

「ラオス国立大学の模範的な大学生」を示すポスター（左から、女子学生の制服、学校生活での行い、男子生徒の制服）

ラオス国立大学の中枢「事務棟」

・ノンフォーマル教育

これまで初等教育の就学率が低かったことや退学率が高かったことから、就学前教育の必要性が叫ばれ、政府やＮＧＯによって、幼児教育をする幼稚園や下校後の児童センター（児童館）などが設けられてきました。ＮＧＯなどによる図書普及活動やお絵かき、音楽などの学校時間外活動も都市部では充実してきましたが、まだ全国レベルには至っていません。一方、何らかの理由で初等教育を受けられなかったり、途中で退学してしまった人のために、初等教育レベルの補習教育が行われていましたが、近年の就学率の向上とともに初等教育の補習教育は全国的に終了し、地方での中等教育レベルの補習教育が残るのみになっています。それに代わって職業訓練教育に力を入れるようになってきました。こうした職業訓練所には、職に就く上での技術、知識などの習得を目的に、年齢に関係なく入学できます。縫製、美容、調理、木工などで、ホテルに就職したり、自分で開店するなどのほか、一部には公立の職業学校に編入する人も出てきました。これらはラオス教育スポーツ省ノンフォーマル教育局の管轄で、その下にビエンチャン都、北部と南部にそれぞれノンフォーマル教育開発センターがあります。

参考文献；

・研究代表　天野晴子　「開発途上国における生活支援のための教材及び指導法の開発」日本女子大学総合研究所『日本女子大学総合研究所紀要　第 18 号』　2015.11

・津曲真樹「ラオス教育セクター概要」2012.10
jp.imgpartners.com/…/A5E9A5AAA5B9B6B5B0E9A5BBA5AFA5BFA1BCB3B5C0E…
（2017 年 10 月最終閲覧）

・ラオス国家統計センター / National Statistics Centre（英）http://www.nsc.gov.la

・外務省 http://www.mofa.go.jp/mofaj/

・日本貿易振興機構（JETRO）https://www.jetro.go.jp/

・国際協力機構（JICA）https://www.jica.go.jp/

(2017 年 11 月　記)